

行う学生・大学院生がそれぞれの分野を軸としながら地域を重層的に捉えその動態を地域史・研究史の中に位置づけようとするとき、多くの示唆を与えるだろう。さらに、今後も同様の視点・アプローチによる景観研究が蓄積されることで、本書では抑制的に触れるにとどまった、人々の誇りや価値観を内包した日本山村の景観の「未来」の在り方が描かれることを期待する。

(佐々木綾子・日本大学生物資源科学部)

参考文献

真田純子. 2023. 『風景をつくるごほん』戸田：農山漁村文化協会.

正田智樹. 2023. 『Foodscape フードスケープ 図解 食がつくる建築と風景』京都：学芸出版社.

新倉久乃. 『在日タイ女性の高齢期と脆弱性——トランスナショナルな社会空間と埋め込まれたジェンダー規範』明石書店, 2024, 252p.

今や様々な形で日本に来て働くアジア系移民は、私たちの日常風景の一部になっている。しかし彼らの生活の実態、本国との関係や彼らにとって将来に向けてどのような選択が可能なのか、同じ国で生活しているにもかかわらず私たちはほとんど想像も及ばない。2022年に提出された博士論文をもとにした本書は、在日タイ女性を対象に、こうした点について、その原因や問題点とともに明らかにする。主たる資料は2016年10月から2021年11月の期間に実施された調査において収集されたデータだが、その背景には著者がNGOなどの支援活動を通じて長く在日タイ人の人身取引被害者や生活困窮者のための福祉や生活相談に関わってきた経験がある。

本書の目的は、在日タイ移住女性が高齢期を迎えるにあたり、どこでどのような条件のもとでどのような高齢生活を選択するのか（できるのか）を論じることである。そのために日タイの越境的な家族関係の実情、両国の家族において女性たちに期待される役割の相違とともに、日本における

福祉や在留資格の諸制度がもたらす制約を明らかにし、それらのために選択肢なき選択をせざるを得ない状況があることを描き出している。主たる調査対象は、1980年代から90年代にかけて来日し、壮年期に生活困窮を経験した15名の在日タイ女性たちである。著者は彼らに対して複数回のインタビューを行いつつ、その活動や生活場面に参加し、内1名についてはタイへの一時帰国に同行したほか、制度面の情報収集も行った。

本書は序章・終章および7つの章で構成される。序章では、目的や調査について説明したうえで、本書の分析・理解に直接の示唆となった先行研究や論点が紹介される。移住女性労働者をめぐる「ハードな」経済的、物理的、法的な制約の一方で、ジェンダー役割をめぐる規範の解釈や意味の再構築などが可能な「ファジーな」制約があることが指摘される。先行研究の紹介を通じて明らかになるのは、日本における移住女性の高齢期に向けた経済的な脆弱性やそのなかで可能な選択を論じるという本書の課題が、多岐に広がりをもった問題であるということ、またこうした探究自体が新しい試みであるということである。

まず第1章では、在日タイ人女性の歴史的制度的背景が提示される。1980年代以降の在日移住タイ女性を中心とした在留資格状況の変遷と、彼らをめぐる社会保障や福祉の法的制度が紹介される。この時期に来日したタイ人移住者は、日本人と婚姻関係を結ぶことによりその後永住者となる者がある一方で、DVや離婚等の挙句に貧困を経験しつつ単身で子を育てた定住者もいる。日本の諸制度には、子は母が育てて当然で（「母子一体」）、父親が主たる稼ぎ手であるべきとする家父長的ジェンダー規範が埋め込まれており、これが彼女たちの選択に大きく影響することが述べられる。

第2章では、在日タイ女性の日タイそれぞれにおける立場や関係性、それを理解するための概念枠組を提示している。彼らは両国に家族を持ち、タイ側では娘として母として拡大家族への責任と、親や育ててくれた人の恩（ブンクン）を返すことが期待され、日本側では妻として母としての役割が強調される。両国の家族それぞれにおける役割を時と場面に応じて複合的な背景のもとで選択し

ており、これを理解するために用いる概念として「感情的紐帯と経済的紐帯の分かちがたさ」を挙げている。彼らはまた日本ではエスニック・グループの一員としてNGOや自治体との関係も持つが、グループ内の経済格差を含む関係性のなかで経験する「相対的剥奪感」も分析概念として挙げられている。

第3章では、3名の在日タイ人女性の詳細な語りの事例をもとに、タイと日本それぞれの家族との「感情的紐帯と経済的紐帯の分かちがたさ」が、どのように彼女たちの壮年期の選択を制限してきたかを検討している。タイで娘として母としての役割を全うすることと、日本で妻として母としての役割を全うすることの間で選択を迫られてきたこと、それに際しては、国家間の経済関係や在留資格制度によって生じる日本での夫婦間の不均衡に加え、日本の福祉・社会保障制度による制約があることが明らかにされる。

第4章では、以上のような壮年期における選択や制限がその後、高齢期の準備に際してどのように影響してくるのか、その結果高齢期を日本とタイのどちらで誰とともに過ごすかが選択されることを明らかにしている。前章の1名を含む3名について、高齢期に向けて娘、妻、母としての役割を全うしつつ今後の住処や生活をめぐる選択（時には選択肢なき選択）を迫られる様子を描き分析を加えている。特に両国においてこれまで築いてきた「感情的紐帯と経済的紐帯」、社会保障や在留資格の制度的な諸条件等がその選択の要因となる。

第5章は、先行する二つの章を受けて既に登場した3名の事例から、日本の生活保障のポータビリティ（国外に持ち出せるか否か）と、年金制度のジェンダー格差、在留資格などによって経済的なサポートに様々な制約が加わり、高齢期に必要なケアが増すケアが制限されるなかで、タイまたは日本で高齢期を迎えるうえで困難が生じる要因を明らかにする。

第6章は、1980年代以来日本各地で形成されたタイ人の「エスニック・グループ」の役割を検討する。在日タイ女性にとってエスニック・グループは、疑似家族的な感情的紐帯という包摂的なプラスの側面をもたらす社会的資源である一方で、可変的で継続性がない。さらに、グループ内で経

済格差とともに「成功者のイメージ」が形成され、そこから疎外され相対的剥奪感を抱きグループから距離をおく者がいるというマイナスの側面があることを、特に高齢期に向かうある女性の事例をもって検討する。

第7章は、家庭やエスニック・グループの外にある在日タイ女性の支援者として、自治体窓口担当者やNGO職員に対して彼らを感じる感情的紐帯について検討する。女性たちの生活を支える制度的な可能性について親身になって相談に応じる自治体職員や、本人の背景や事情を知り、最良の選択をするためにNGO職員が担当医とともにアドバイスすることで、相対的剥奪感を抱いていた本人を支援する様子を描き、同時にその限界を指摘する。

終章では、これまでの事例から論点を再度まとめて提示し、結論としてトランスナショナルなライフコースにおける脆弱性として、両国におけるジェンダーをめぐる社会関係、規範、格差に焦点を当てることの意義を確認し、在日タイ女性の高齢期の脆弱性は壮年期の生活困窮、在留資格や社会保障制度の制約によって持ち越されること、それらの結果として「選択肢なき」選択として日本での永住を選ばざるを得ないことがあると指摘している。こうしたケースを考えれば、日本でもトランスナショナルな背景を考慮して社会がこれを支えていく社会的資源の用意が不可欠であると提言して結ぶ。

本書を読了して、昨今メディアでも耳目に触れることの多い「多文化共生」が、実際にどれほどの課題を抱えているかを実感させられた。本書の目的は、数値でもって統計的に困窮する人々の割合や度合いを示すことではなく、彼らがどのような制約のなかで選択を余儀なくされているかを詳細な事例を通じて示すことであり、特に3-5章では、なぜ彼女たちが困窮せねばならず、どのような選択をせざるを得なかったかをリアリティをもって説明することに成功している。

特に三つの点で貢献が大きい。第一に、あまり知られていない事象に光を当てることで、東南アジア研究、移民研究のみならず日本社会の理解に貢献している。在日タイ女性たちが壮年期から高齢期へと向かう30年以上の時を経て、日タイ両国

の間でどのような困難を抱えてきたか、これまで移民研究者の間でも十分に把握されていなかった実態を明らかにしている。第二に、在留資格や社会保障などの制度の問題点について特にジェンダーの視点から明らかにしており、日本における移民・移住研究や福祉・社会保障の研究にも身に迫る事例をもってオルタナティブな視点を提供する。在日タイ人女性の間でも経済格差が広がっているが、それは婚姻ステータスや結婚相手の経済力・健康状態等によるもので、女性たちの在留ステータスは夫や子との関係に依存せざるを得ない。壮年期に生活困窮を経験した女性たちは、高齢期に向け選択肢を狭められ、社会や行政のサポートに頼らざるを得ないことを、生きた事例をもって教えてくれる。共生の理念を少しでも実現していくためには、現状の法制度や在留資格がどのような枷となっているか、どのような社会的支援が必要かを提起している。第三に、日タイのトランスナショナルな空間で二つの家族、二つの社会の間を往来する女性たちが、異なるジェンダー規範の間でどのような困難を経験しているか、これは両国のジェンダーや家族の研究、そしてトランスナショナル空間の研究への大変興味深い貢献である。タイと日本両国における女性の娘・妻・母役割の相違、ジェンダー規範を生活のなかで体現しようとする女性たちの意志とともに、日本側のジェンダー規範が埋め込まれた制度によって彼女たちの選択がどのように制約を受けるかが示されている。

こうした新しい知見は、いずれも本書のために実施された調査のみならずその背景となった著者の市民活動家としての経験が背景にあり、これが事象の理解に厚みを与えている。複数の章で登場する人物については、知るほどに個々の事例における複雑な要因が浮彫になり、両国間の家族や規範、制度の複合的要因の結果であることが説明されるが、実際に現実とはこのように複雑なものであることを思い知らされると同時に、そこにはいくつか主要因があることも説得力をもって示している。

最後に、気になった点を3点ほど挙げる。第一に、分析概念として挙げている二つの点である。「感情的紐帯と経済的紐帯の分かちがたさ」におい

て、「感情的紐帯」の内容があまりに多岐にわたる。親密圏での具体的なケア、親族同士の信頼関係、エスニック・グループ内での支援関係、自治体職員の誠意ある対応に対して抱く信頼、子に対して理解を示すよりも見返りばかり求める親、そしてつれ子の養育を支えてくれた夫に「ブンクン」(恩義)を返すべきという倫理観、これらに対して当の女性たちはそれぞれに異なる応じ方をするのだが、そのすべてが「感情的紐帯」でくくられるなら、それは何を説明したことになるのだろうか。これをもって経済的紐帯以外の様々なものを包含してしまう結果、両者の「分かちがたさ」とは、平たくいってしまえば「いろいろな要因がある」という結論、すなわち著者が述べるどころの「複合的要因」と同義に思える。また今一つ概念「相対的剥奪感」は、エスニック・グループ内の経済格差が大きくなり、そこから困窮者が自ら距離をおく要因を分析するものだが、本書でこの点に関する事例はある一人のタイ女性の経験についてのみ提示されている。日タイ両国での家族的経験や本人の健康も含め複雑な要因をいくつも含み、非常に心に残る事例であるが、その経験を理解するうえで「相対的剥奪感」は一要因であるとしても、どれほど重要だろう。総じて提示された二つの「概念」が、事象の説明に適當であるか疑問を感じた。

第二に、家族以外には、エスニック・グループや自治体職員、そしてNGOなどが登場するが、これで在日タイ人女性の社会関係は完結するのだろうかという疑問が生じた。インタビュー中心の調査であるという限定を理解しつつも、彼らの生活圏や交友関係、日常生活について少し垣間見ることができれば、これらの関係がクローズアップされることも納得できたかもしれない。

第三に、論の運び方である。全体に非常に丁寧に事前の議論紹介、分析中の議論展開、小括や終章のまとめがあるため、論点は把握しやすいのだが、繰り返しが多と感じた。また何度も分析の最後に「脆弱性」を「生んだ、増した、孕んでいた、に起因する」といったように「脆弱性」が結論として言及されるのだが、あらかじめ研究対象を生活上の困難、すなわち脆弱性を抱えた15名に絞っていることも考えると、やや同語反復的な議論に

陥りやすいように思えた。

とはいえ、本書がこれまで十分に光を当てられてこなかった問題を鮮やかに照射し、トランスナショナルな空間におけるジェンダー規範の相違による葛藤や困難、在留資格や社会保障制度における諸問題、そして在日移民の特に女性にとっての高齢期の問題を明らかにしたことはあえて指摘した問題をはるかに超えて重要であり、移民問題に関わる研究者のみならず市民、行政、政策立案者にも読んで知ってほしいと願わずにはいられない。

(速水洋子・京都大学東南アジア地域研究研究所
連携教授)

||||| 徳澤啓一；山形眞理子（編）. 『東南アジア
の文化遺産とミュージアム』雄山閣, 2023,
||||| 225p. |||||

文化遺産、特に世界文化遺産が観光の目玉になって久しい。文化遺産とはおおくの場合、それぞれの地域にもともと存在した有形・無形の固有の「何か」が、「文化」として地域のコンテクストから剥ぎ取られ、「遺産」として、つまりは「皆のもの」として地域へ再度埋め込まれたものだといえる。その典型が、人類を分母とするユネスコの世界文化遺産である。今日の観光産業のなかで、エキゾチシズムの引き金となる文化遺産は一種の資本として、付随するミュージアムはその歴史的背景の描写を通じて資本の価値を高めるための説明装置として機能している。

一方で、文化遺産は形づくられてから今現在に至るさまざまなコンテクストの上に成り立つものでもある。特にそれを「所有」する国民国家の近現代史的・政治的コンテクストは文化遺産のもつ現代的課題と直結するのであるが、遺産そのものの説明に特化した現地解説板やミュージアム展示から、それらをうかがい知る事はむずかしい。

本書は、単なる文化遺産の紹介でもミュージアム紹介でもなく、こうしたギャップ、つまり文化遺産そのものとミュージアム展示、そして個々の文化遺産がもつ現代的課題の三者を繋ぐエッセイ集である。東南アジアの国々が直面する文化遺産

の現実と課題について、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、フィリピン、インドネシアをフィールドとする研究者が、それぞれの地域における遺産と現地のミュージアムを取り上げ、その価値、保護の取り組み、特色ある活動等のさまざまな論点を検討している。全15章で構成されているが、各章ごとに繋がりはなく、それぞれの著者による独立したテーマ設定となっている。まず、林業央による第1章「東南アジアの世界遺産とミュージアム——ユネスコのミュージアム支援事業を中心に」では2011年からカンボジア、ラオス、ベトナムで展開された世界遺産関連ミュージアムプロジェクトなどのユネスコのミュージアム支援事業が紹介される。

続いて3名の著者によってベトナムにおける世界遺産とミュージアム論が展開される。俵寛司による第2章「フランス極東学院のインドシナ研究と博物館」では、仏領インドシナにおける東洋学の展開のなかで、植民地各地に設立され、独立後にもそれぞれの国に引き継がれた博物館の設立過程が詳細に論じられている。山形眞理子による第3章「チャンパの世界遺産『ミーソン聖域』とサイト・ミュージアム」は、ベトナム中部の世界遺産であるミーソンの保存修復の歴史とサイト・ミュージアムである「ミーソン博物館」を紹介するとともに、地域住民とチャンパの歴史を繋ぐ試みとして、博物館の最近の活動である移動展示の可能性を論じている。同じくベトナム中部を取り扱った菊池百里子の第4章「ホイアンの文化遺産と博物館」では、世界遺産ホイアンの概要と、ホイアンにおけるフィールドミュージアムのあり方を特徴づけている、多数のテーマ別博物館が紹介されている。

第5章と第6章ではラオスの文化遺産とミュージアムが取り上げられる。清水菜穂による「ラオス北部から中部における埋蔵文化財調査・文化財保護と博物館——ポスト COVID-19の現状と課題」では、文化遺産とミュージアムの関わりよりもむしろ各地の文化遺産における考古学調査成果の紹介に力点が置かれている。一方、小田島理絵による「ラオスの文化的景観と博物館——遺産マネージメントと観光」では、ラオス南部の世界遺産ワツ